

# 正法眼藏の側面觀

橋田邦彦述

私が只今紹介に預りました橋田邦彦でございます。この度林屋先生を通じて何か皆様の前でお話をするようにといふことでもございましたが、考へて見ますと私が貴方がたにお話をして宜いことか悪いことかどうも判断が付かないのであります。けれども正法眼藏を兼ね／＼拜讀させて戴いて居る者として一度はこの學校へも御伺をして見度いといふことは豫ての心願でもあつたので、之を機縁に皆さんと御近付になることを得れば大變に幸福だと存じまして、烏滯がましくもお話を申上げることが引受けたのであります。であります私のお話申上げることが、表題にも掲げて置きました通り全くの側面觀であります。側面から觀たものを正面に道元禪師を御覽になつて居る皆さん方へ申上げるといふことは、全く要らないことであるかのやうにも考へられます。併し他方から考へますと、正面から觀て居るものが必ずしも正しく觀て居るとも限らない、又側面から觀て居るものでも必ずしも間違つて觀て居るとは限らないのであります。尤もそれは私が正しく觀て居るといふ事を申上げるものではありません。場合によれば、側面から見て居るに過ぎないけれども、間違つては居ないと云ふやうなことが、若し私の申上げることの中にあつて、眞正面から道元禪師を御覽にな

つておいでなさる皆さんのお考或はお氣持といふやうなものへ、何かの参考にでもなりはしないかといふやうな少し附上つたやうな氣持で参つた様な次第なのであります。

私が眼藏を拜見する機縁を得ましたのは、今から十七八年前になります。それから今日まで日々殆んど手を離さず拜讀させて戴いて居りまして一向に解らないのであります。この眼藏の解らないものだといふことは、是はマア諸君も御存知だと思ひます。解らないと云ふことを申上げる丈けではここへ立つてお話をする意味は全々無いものと思ひますがその分らなさ加減の中にどうすれば分りさうだかといふやうな光が全々無いでもありませんので、そのやうなことを申上げて見たらばどうかと思ふのであります。

先程御紹介にもありました通り私は大學を卒業した當時から以來今日迄生理學の研究に没頭して居る者でありまして初めの頃は生理學を専門にやるといふので専門的な研究に従事して居つたのでありましたが、その内に生理學の講義を始めなければならぬことになつて來ましたので、さて講義を始めやうとしますと生理學といふものは大體何であるかといふことを、一應考へて見なければならぬになりました。それについて段々考へて参りますと、結局吾々が生きて居るといふことは抑々何かと云ふことが問題になつて参つたのであります。元來生理學は「生きて居る」といふことは何かと云ふことを知らせる學問ではなく「生きて居るもの」がどんな様子のものかといふことを知らせる學問に止まるのでありますから、生命それ自身など云ふ根本問題などを生理學者が研究するといふことは考へ方に依つては、用は無いことであるとも思はれます。それを知らないからといつて、生理學者になれないことはないと云へば云へますが、併し

教壇に立つて學生に生命に關係のある問題を講釋する者が生命といふことは何かと云ふことを質問されたときに答が出来ないので、是は講釋をするに値しない者であると云はなければならぬといふ考が起つて來まして、どうしても「生きて居る」ことは何かといふことが切實な問題になつて參つたのであります。以前から王陽明先生の書かれた物などを時々拜見して居ることがありますし、その引懸りから先年歿なられました忽滑谷老師が「王陽明と禪」といふものを著はして居られたのを拜見したこともありましたが、或は何か禪の書物でも讀めば、或は禪といふものへでも入り込めば、生命とは何かといふ事へ光が見出されはしないかといふやうな氣持がしましたので、そこら邊にある書物をあれこれ漁つて廻つたのであります。例へば南天棒老師の提唱などといふものを可成り澤山讀んで見ましたが、一向に物に觸れるまでの機縁は熟して來なかつたのであります。其の内に或書物で道元禪師の「正法眼藏」といふ書物のあることを初めて知りましたが、どういふものか知らない、何處で賣つて居るものであるかすら知らないながら、兎に角「正法眼藏」を讀んで見なければならぬといふ氣分になつて參りまして、早速大學の圖書館に入り込んで探しましたところ、幸にありました。それと同時に何かこれに關係のある書物はないかと探して居る内にぶつかりましたのが「眼藏御抄」でありました。それは誰かの筆寫したものでありまして、全部で三十一卷になつて居りました。そこで早速その筆寫を借りて參りまして讀みかけたのでありますが、讀んでも中々分りません。そこで之はどうせ一先づ自分で寫すか何かしなければ仕様がなだらうと云ふので少しばかり寫し始めて見たのでありますが、其後間もなく或る古本屋に行つたところが「正法眼藏抄」として明治年間に出版されて居るものゝあるのを見て、實に嬉しかつたので

あります。早速それを買込んで手を離さず読み出したといふやうな次第であります。

前に申しました通り大學圖書館で見出した眼藏の御抄は寫本でありましたが、それに慧輪禪師が書寫の由來を述べたものが巻首にありましたが、それが神保老師などの御骨折りで出來上つて居る正法眼藏註釋全書の中にも出て居らないので大變に遺憾に思つて居りましたが、最近永久岳水師の「正法眼藏註解新集」の中には出て居りまして、大變に喜しく思つたのであります。私の拜見しました寫本の首めには右の由來書きの前に寫書の精進を大變に賞讃した慧輪禪師の序文がありまして、幸にそれは私の所に寫取つてあります。此の寫本は先年の震災のとき焼けたのは甚だ遺憾なことであります。私は右の書寫の由來を拜見したときに、實に感慨無量でありまして、今でもそれを思ひ出すと熱い涙を禁ずることが出來ないのであります。私も力及ばずとも出來る丈けの勉強をし度いと心懸けて居つたのであります。右の正法眼藏御抄は二人の方が寫したものと、複寫でありましたが、その二人の方が原本を寫し取るのに如何に苦心されたかといふことがありありと見えるやうに書いてありまして、其の精進努力は實に驚くより外はなく感歎の辭のない程に感心したのであります。吾々は學校で黙つて居つても色々なことを教えて呉れる、書物が欲しいと云へば容易に手には入る、一千頁も二千頁もの大冊でも僅かな金で買へるのでありますが、それに比べて昔の人々は如何に艱苦しなければならなかつた、亦如實に艱苦に堪へて、それを自分のものにするのにどんな骨折をも恨まなかつたといふことを熟々感じたのであります。現今學問するものは實に有難いことであります。併し有難いには相違ないが、その有難さは被はれて吾々は怠け過ぎて居るといふことを切に感じたのであります。そんな工合でそれ以來正法眼藏を始終拜見させて戴いて居

るのであります。併し私は自然科学に従事して居るものでありますから正法眼藏といふものを道元禪師が書かれた眞實の意味に於て拜見して居るといふことには決してならないと思ひます。けれども、併も私の持つて居る科學と云ふものが現實この眼藏に依つて生かされるといふことだけは疑ふ可からざる事實なのであります。若し私の見て居る正法眼藏が道元禪師の正法眼藏であらうとなからうと、それは云はゞ私には全然用のないことで私の學問といふものは、この日日携へて離さない・手を離さない正法眼藏といふ文字に現はれたものに依つて、生きて居ることだけは現實の事實なのであります。その正法眼藏といふものが何故私の學問に生命を將來して呉れて居るかと申しますと、この正法眼藏の中に現はれて居る思想とか、或は哲學的な體系だとかいふやうなものが、私の學問を學問として、生かして呉れて居るではありません、然らば何が私の學問を生かさせて呉れるかといふと、その正法眼藏を通じて到る處説いてある「行」といふことがそれであります。この正法眼藏を通じて私が拜見して居る處では、道元禪師は「行」以外に何ものをも説いては居られない「行」を抜きにして正法眼藏を拜見しやうと云つたならば、それは根本的に間違つて居るものであると私は信じて居るのであります。然らばお前の「行」は何だと云はれるかもしれませんが、私が日々生理學の研究に従事して居ることが私の「行」であります。何も採香を薰き佛を念ずると云ふやうな事が必ずしも「行」といふものではなく、それだけが「行」ではないのであります。私は先程衛藤先生からお話のありました通り、或は動物を解體し、或は生きた儘に使ふ、或は人間をも對象として科學的に研究して居るのであります。その様なことそれ自身が私の「行」であるといふことを體得しない分には、私の學問は學問として少しも生命はないものであります。私のやつて

居る事が「行」であるといふことに考を向けさせて戴いたものが、この正法眼藏に外ならないのであります。無論どの佛教の書物を讀んでも「行」といふことが説いてない書物はないのでありませうし、従つてそれなら何も正法眼藏を讀まなくても分つて居る話だといふことを批難されるかしれません、それは私の問題ではありません。私の問題は正法眼藏によつて自己の行を獲得し、行を行として行ずることを識得しなければならぬことを教へて貰つたことであります。そういふ意味合で現實私は科學といふものと正法眼藏といふものとは離す可からざるものであるといふことを信じて居るのであります。若しも正法眼藏といふものが所謂宗門の書物、吾宗門第一の書物といはれるものであるとしますならばこの點に於て科學と宗教は一體になるべきものである、二つのものが離れ離れに考へられるのは、恐らくは科學を概念の立場に於て觀て居る人、或は宗教を概念の立場に於て取扱つて居る人が云ふことであつて、眞實宗教を宗教として科學を科學として生かして居る人があつたならば兩者は正に一つのものであるといふことを考へずには居られないであらうし、只考へるのみならず眞實さうであることを體驗せずには居られないだらうと考へて居るのであります。さういふやうな意味で私は正法眼藏を拜讀して居るのでありますからして、私がこの正法眼藏に就いて例へば誰かへ話をする、講釋をするといふやうなことをしましても、哲學者として觀て居るでもなく亦所謂佛教學者として觀て居るのでもなく、唯自然科學者としての體驗だけから正法眼藏を解釋して居るのでありますから私の考へ、又は觀方が宗乘的に正當であるといふやうなことを主張しやうなどは考へて居ないのであります。でありますが先きに申しましたやうな點から考へて、目下の吾々の務、或は日本の學問といふことに於ける重要なことは、この正法眼藏といふものを科學者へ理

解させるといふことでありまして、唯之を宗門だけのものとして宗門の人達丈けが弄んで居つたのでは相濟まぬものであると考へます。日本の人は科學者と云はず、宗教者と云はず機縁ある人々は何等かの方法に依つて、之を拜讀するに於て自己の「行」を把握しなければならぬといふことを私は始終考へて居るのでありますが、その科學者でない方面に於ては、宗門の方々が或は御紹介になつたり、或は説いて下さつて居ることゝ考へますけれども、科學者に對してこの眼藏を弘める事は、是は實に大變な仕事でもあるし、亦誰も手を着けて居らない問題なのでありまして、場合に依りましては、出來れば私の如きその第一着子を輸けなければならぬとも思つて居りますけれども、實の所お恥しいことでもあります。私にはまだ力が足りません、そこで先づ差當り自分の周圍に集つて來て居る僅かな人に對して私の觀た眼藏といふものを説いて居るのに過ぎない次第でありますけれども、私の願念として居りますところは、若し日本の科學者が、この眼藏を會得して科學に従事することになれば、その時始めて我日本の國の科學といふものが本當に樹立されるやうになるが、若しその立場に來ないで科學を取扱つて居るのならば、結局、歐米の科學の模倣の域を脱し得ないのだといふやうにも考へて居るのであります。我邦の科學は、その成果の上から觀れば、外國の人のやつて居ると大體肩を比べるやうなものになつて來たのみならず、中には外國のものよりも遙かに擢んで居ると考へるやうなものも相當ありますが、唯それ丈では結局外國人の或は歐米人の立場に於て學問をして居るのであつて、以前は或人が日本の科學は歐米の科學の植民地であるといふやうなことを言つたことがあります、その域を脱しないのでは、何處まで行つても日本の科學は存在しないことになります。日本人が科學を科學としながら日本の科學を樹立させないと云ふのでは

當に日本人であることを忘れて居るものであると云はなければならぬと考へます。この日本人として科學すると云ふことは如何にすれば出来るかといふ問題を解決しやうといふのに、所謂日本主義或は日本精神といふやうな抽象的なものを持出して見たところで、決して力にはならないのであります。その日本的な科學、日本の科學に力あらしめるものは、この眼藏であると私は信じて居るのであります。

所で然らばこの眼藏を科學者の立場からどう觀て居るかといふ事を一々申上げなければならぬことになりますけれども、私の有つて居る自然科學といふもの其自身がどういふものであるといふ事を一々皆さんにお話ししない前に、科學的に觀た眼藏といふやうなことを抽象的にお話申上げてても一向眞實に觸れないかと思ひますので、そのお話は又何かの機會に譲りまして、今日は私の考へて居る所で一般的に眼藏といふものをどうみて行かなければならぬかといふことに就いて聊か述べて見たいと思ふのであります。

さて正法眼藏は御承知の通り道元禪師全集とか或は本山版とかの中には正法眼藏をお書きになつた年代の順序に列べられてあります。これは所謂九十五卷本と云はれるものであります。これも亦皆さん御存知でありませうと思ひますが昔は七十五卷本の眼藏といふものがあつたさうであります。私はまだそれを拜見したことはありませんけれども、正法眼藏には正法眼藏、現成公案第一、正法眼藏摩訶般若波羅密第二、正法眼藏佛性第三といふ風に七十五迄順序が付けてあるのであります。この順序の付けてあるといふのは道元禪師滅後に付けたのだとか何とかいふ色々な論もあつたらしいのであります。最近大久保道舟師の編纂された先刻申上げました道元禪師全集の解題を拜見すると、この順序は所



謂眼藏結集の前から道元禪師が付けて置かれたと見做さなければならぬものであるらしいのであります。さうすると眼藏は現成公案第一、摩訶般若波羅密第二と書いてある。その順序に従つて讀んで行かなければならぬことは明であると考えられきす。にも拘はらず、例へばその順序を追ふて釋してある書物も昔のものにはありますけれども、今では話がさういふ順序になつて居らないのではないかといふやうに觀られるのでありますが、いかゞのものでありませう。それに就いては、私がこの眼藏を拜見をするやうになつた際に眼藏の御抄と云ふものに眞先にぶつかつたことは實に因縁が深いことだと考へて居るのであります。御承知の通り御抄は七十五卷の順を追つて釋してあるのであります。私はさういふことは、何も知らないで唯眼藏の御抄を見たところが現成公案第一として現成公案が釋してあつたので、先づとつきに讀始めたのが現成公案であります、現今普通ならば辨道話から入つて行くことになるのかも知れませぬけれども、私が辨道話を拜見したのは後であつて、眞先に現成公案を拜讀したのであります。所でその現成公案を拜見しまして、その現成公案といふことが正に自然科学者がやるべき物の觀方がはつきり示してあるのを見まして實に嬉しかつたのであります。所で自然科学は科學の代表者として、普通他の科學例へば文化科學などよりも尙一層科學的なものとして考へられて居つて、科學といへば自然科学と云ふ風に考へる所以のものは何かと云ひますと、あるものごとを有るが儘に把握する、有るがまゝに觀るといふことを目指して何等かの意味でこれを實現して居る所に科學といふものが成立つて居るといふ意味からであります。科學といふものに依つて吾々が世界を歪めて觀て居るといふことが考へられるのならば、科學といふものは寸毫も値しないものであるけれども、科學といふものは眞直な歪められない世界を觀やうとして

居る事だけは明かな話であつて、これが何處まで成遂げられて居るかどうかは問題であるとしても、少くとも科學が爲さんと欲して居ることは何かと云ふと、現成公案として世界を觀又世界を把むといふことに外ならないのであります。そこでこの現成公案といふことの意味が本當に解れば、或意味から申すと科學者にはこの正法眼藏の他の部分は要らなると云つても宜いほどのものかとも考へられます。又一方から申せばこの正法眼藏全體を通覽しましてもそれ／＼文字が違ひ、述べてあることが違ふやうであるが述べてあることは一貫して「行」であり、一貫して現成公案であつて、これに就いて述べてない所は何處にもないと云つて宜しかと考へます。この現成公案が正法眼藏第一として眞先に掲げられてある所以は實に意味の深いことであるといふことを讀む度毎に感ずるのであります。吾々が眞實この世界を現成公案として觀ることが出来れば其れ以外何物もないのであります。

所で現今の自然科學或は科學といふものゝ立場はこの現成公案の立場と一致して居るか云ふに相ではありません。その合はない所は何處に在るか云ふと科學の世界は正に觀られた世界であつて、觀るものゝ問題が除外されて居るのであります。觀られる世界と云ふときには、云ふまでもなく觀るものと觀られるものがあつて、對立して居るのであつて、觀て居る限りに於ては觀るものは其處へ現はれて來ないのであります。故に、科學に於ては觀るもの乃至觀ることそれ自身の問題は除外されて居る世界を觀て居るのであります。かく科學の世界が觀られた世界であつて觀るものといふものが除外されて居るのであれば、觀るもの乃至觀ることそれ自身に就いてどう考へられて居やうとも世界を全面的に把んで居るのではなく、單に一面的に把んで居るのであるといふことにしかならないのであります。そこで科學がど

れだけ進歩しても、どれだけ精確になつても、又やつて居ることが間違が無くとも、科學が適用されるのは、世界の半面に於てもあります。吾々は先づこの半面であるといふ事を確か見定めることが必要であります。さて他の半面を補ふものは何であるかと云ふと、その補はるべき半面と云ふものは、哲學的に謂ふ主觀といふものであるかの様にも見えますが、唯主觀といふものを科學的世界にくつ付けて見ても、結局觀られた世界以外の何物でもないのでありまして、この世界を「觀る」とかいふ事が抑々どういふことかといふ事がはつきりして來なければ他の半面を實際に補ふ譯には參らぬのであります。それではどうすればいゝかと云へば、その觀られた世界の中に自己が即ち觀るものそれ自身が入り込んで行かなければどうしても全面的な世界は其處へ現はれては參りません。この觀るもの其自身が觀られるものゝ中に没入することは、これが「行」であります。私はかゝることを觀行と云ひ現はして居ります。即單に觀るといふこと丈けではなくして、この觀といふ事が行として現はれて來なければ、眞當に觀る事にはならない。言換へれば「觀られるもの」が「觀るもの」、「行」として觀られて居ると云ふことになつたとき、始めて、本當の世界が觀られて居るのであります。世界を觀るには色々な立場があります。科學的に觀るならば科學的に觀て宜しいが、科學的に觀ることが觀るものゝ行である立場に於て始めて科學的に世界の全面を見渡して居るのであります。即ち觀行一如が科學者の取らなければならぬ立場であります。このところは私の周圍の人には始終話して居るのであります。是は結局現成公案に示してある所であります。併し現成公案の卷を見ますと、一應は世界を如何に觀るかといふことが述べてあるやうに見えます。即ち物の觀方が、述べあるやうに解釋出來ますが、その物の觀方を示してある中に何時でも行として見なければならぬ

といふことが現成公案に陰に陽に説き示されて居ります。これが現成公案が科學者に對して實に重きをなす所以である  
と考へて居るのであります。さういふやうな點から、かやうに正法眼藏が現成公案第一から始まる排列の仕方は實に深  
長の意味の有ることでありまして、現成公案を讀まないで眼藏を讀むことは意味がないと迄は云へないにしても、少く  
とも本筋ではないと考へます。眼藏のどの卷を拜見しても結局同じことが書いてあると考へます。その意味でどの卷を  
拜見しても別に間違はないのでありますけれども、少くとも科學者が正法眼藏を見やうとすれば先づ現成公案から見  
行くのが順序であると信じます。そのやうなことを全く知らないで私は先づ第一に現成公案を拜讀する機を得たとは、  
實に機縁が淺くなかつたのだと考へて實に有難く思つて居る次第であります。そこで六十五卷に列べてある列べ方を見  
ますと、現成公案・摩訶般若波羅密・佛性……と云ふ順序でありますが、今申しました通り現成公案の卷に於ては觀方が  
示してあります。まあ極上ツすべりを申しますと、世界を見やうと言ふには、どういふ立場で觀なければならぬかと云  
ふことが示してあります。摩訶般若波羅密第二も先づ同様な話でありますが、それから佛性第三になると、觀方と云ふ  
ことに次いで問題になる觀られるものは何か、觀られたものとして何がそこに出て來るかと云ふことが述べてあるとい  
ふやうに解釋をつけることが出來ます、そのやうな意味から摩訶般若波羅密第二は恰も現成公案と佛性の橋渡しになつ  
て居るやうに見られることは、實に意味の深い排列の仕方でありまして、佛性の次には身心學道の卷があつて、如何にし  
て學道すべきかといふことが述べてある。その學道といふことに次いで即心即佛の卷があり次で行佛威儀の卷がありま  
す。行佛といふことは道元禪師の宗旨の根本の問題、少くとも其の一つであると信じて居るのであります。即心即佛は恰

度身心學道と行佛威儀の橋渡しになつて居ります。そんな工合で、一々は中上げませんが、その順序を追ふて参りますと、坐禪箴第十二で一先づ一段落が付いて居ります。次の海印三昧第十三となりますと、現象即實在であるといふ詰り現成公案と些つとも變らないものが他の言葉に依つて表はされて居ります。次で空華、光明、行持……等と排列してありまして、同じ筋道が異つた言葉、異つた表現に依つて反覆して述べられつゝ段々と移り變りがあるやうに觀られるのであります。尤もこれは無論そう簡單には云へることはありませんが、兎に角七十五の順序が道元禪師が御自身に御付けになつた排列とすれば無論疎かな排列をしてあることはないのであります。唯表題から見ると、如何にも飛離れたやうなものであつても、中身を拜見すると、決して離れ／＼のものではなく、實に次第を追つて排列してあるやうに拜見されます。そんな工合でどうしても眼藏は七十五卷本の順序に従つて讀むべきものであると、考へて居るのであります。此様な考へ方は無論私の一存でありますけれども、七十五卷の順序に依つて、讀まなければならぬといふやうに考へておいでの方に他にもありますので私の考が全然間違つて居るのでないと思つて居るのであります。

そこで現成公案といふことは一方から云ふと、貴方がたへ申上げるのは、是は釋迦に説法のやうな話でありますけれども諸法實相といふことであることは明かであります。併し、正法眼藏に於ては、諸法實相を述べる前に先程申しましたやうな海印三昧に於て眼象即實在のお話が述べてあります。これ等は何れも科學者に重要な問題を示したものであります。他に私共の注意を惹き、自然科學者の最も重要な問題を示してあるのは、畫餅の卷であります。これは畫餅不能充飢といふことから出て來て居るのでありますけれども、吾々の立場から申すと、世界像の問題であります。自然科

學の方で世界像といふことを申します。例へば物理學的に世界を觀て行くときには、物理學的な世界像が物理學的概念の體系として現れて來る。その世界像に依つて、物理學者は世界に觸れて居るのであるといふやうなことを唱へて居る人があります。そういう立場から云へば、吾々生物學に關係して居るものは、生物學的な世界像に基いて、世界を眺めて居るのであり、文化科學の立場から云ふと、文化科學的な世界像が造られて、それに依つて世界を觀て居るのであります。其やうなものが一集りになつて來れば初めて科學的世界像が出來て來ることになる理窟であります。併しそういう人の立場は世界像を造つて、その世界像に依つて、實在する世界に觸れて居るのだといふ程度のものであつて、何故吾々が吾々の働に依つて、造出した世界像が眞實の世界に觸れて居ることになるかと云ふ問題はどうもはつきり解決が付いて居ないのであります。それは正而に吾々が觀て居る自然を取扱つて、それに依つて出來た自然の像即科學的な世界像は自然といふものゝ體驗から出て來る世界像であるから、それは眞實の世界に觸れて居るものでなければならぬといふ論は一應成り立つやうでありますけれども、吾々の造つたもの、吾々が吾々の働に依つて造出した自然科學がよしんば自然に即して造り出されたにしても、唯々自然科學として其處にあるのではなく、其自然科學と云ふ知識の體系が眞實實在の一面であるといふことは、そんな論によつただけで本當に主張が出來ないのであります。所が畫餅の卷なり或は空華の章なり或は夢中說夢の章を拜見しますと、世界を像として、把握するといふ事がどう云ふことかと云ふことが懇切に述べてあるのであります。吾々は眞の世界像を造ればそれで宜い、實際世界は像としてつかむよりつかみ方がないのであつて、世界像が眞實に出來て居れば、それが世界を眞實把握して居ることになるのであります。吾々の知

らない、世界の木體と云ふものに觸れて居ると云ふ意味に於て世界像に意義があるのではなく、自然科学的に見られた世界の像は、自然科学的に觀られた世界そのものと云ふことが、眼藏を拜見すればはつきり解るのであります。私は上記の立場にある哲學者などがどの様な意味に於て世界が眞實實在するといふのか、又如何なる意味に於てそれが世界像がそれに接觸して居ると云ふのか能くは知りませんが、他の人がどう考へて居るのか、詳しいことは知りませんが、それは別問題として吾々は眞實の世界は像として攬む、丁度畫家が繪を描いて色々な繪具を用ひて繪を描く如くにして吾々が世界を攬んで居るのであるといふことが本當に解れば、問題は何の事もなく解決が付くのであると考へて居ります。さういふ意味に於てこの眼藏の中の畫餅の卷などは、甚だ嗚呼かましい言葉でありますが實に感嘆に値するもので吾々自然科学者が自然科学者として、自分のやつて居ることが眞實の世界に觸れるか觸れないかといふことを考へるとき、この根本の問題を七百數十年前に斯の如く明かに示してあることは實に驚かざるを得ないのであります。その點に於ては、人間といふものが本當に「行」として自己を攬むことが出来れば、それは自然科学をやるとか、或は文化科學をやるとか、何をするとかいふ差別はなく、何處に於ても同じことをやつて居るものだといふことが切に感じられる次第なのであります。自然科学のなかつた時代のことだからどうか、自然科学の出来てからの時代に於てはどうかといふやうな差別は毛頭ないと信じて居ります。唯自然科学或は科學のなかつた時代に科學を通じてでなく表はされて居る表現或は言葉、如何にして科學の世界に持來して生かすかといふことは、科學者自身が自分のやつて居ることを「行」として體驗しなければ到底出来ないことであります。即ち自然科学者或は科學者が自己のやつて居ることを眞實動きつゝある體驗と

して、固定された體驗ではなく、時々刻々動いて停まらざる相としての體驗として、即ち「行」として把握することに於て眼藏を見て参りますと、眼藏は現實の科學者の時々刻々にやつて居ること、それ自身を或言葉によつて述べてあるのであるといふことがはつきりして來るやうに考へるのであります。でありますからして、先づこの眼藏といふものを本當に會得しやうといふのには、是は無論文字の問題ではなくして、この「行」といふことを把握するかしないか道元禪師の申される行佛といふことが眞實其處に實現するかしないかといふことに根底があるのであります。併し尙一度び振返つて觀ますと、この眼藏が少くとも文字で現はされて居る限り、文字を文字として讀むといふことに依つて、この眼藏に現はれて居る體驗の事實を自己の體驗に引比べてつかまへられないことはない筈であります。只「行」をつかまへなければ眼藏が解らないからと云つて徒らに「行」の完成するのを待つて始めて眼藏を讀まふと云ふのならば終生眼藏の解る折はありますまい。そこで一方文字は文字として讀み、同時に他方に於て「行」を「行」として把握することに精進すれば一步一步解る。一こと解り、二こと解り、解ることが段々集つて來たならば其の内には、書いてある意味が追々解つて來る。其の内に全體として連ねてあることの意味がどんなことかといふことが解つて來るやうに考へられるのであります。眼藏を本當に把むと云ふのは、それは文字を脱却したときのことであるからと云つて、眼藏を拜見するには文字の解釋には及ばないといふやうに考へることは間違つて居ると考へます。少くとも文字に現はされて居る限りに於て文字の解釋は出來るのであります。所で文字を文字として、解釋することすらこの眼藏といふものは、非常にむづかしさがある、文字を文字として解釋する事柄がさう難かしくないのならば、眼藏を讀んで誰も難解難入とは感じないであ



りませうが、讀めば讀む程難かしいことは眼藏の特色でもあり、其の本義でもありません。ところでその文字を讀むに難かしいと云ふことに先づ二通りあると考へます。例へば私の側に居る佛教の術語に慣れて居ない者共は初めから佛教の術語にあてられてしまふ、眼藏を讀みさへすればいゝといふ話をすれば、眼藏は讀んだつて言葉が分りませんから讀めませんと云ひます。併し私は云ひます。それだからいかぬ、諸君が生理學の研究に入つて生理學の書物が讀めるまでに何十年掛つて居るか、小學校で教へられ、中學で教へられ、高等學校、大學に入つて色々教へられ、勉強した結果生理學の書物が幾らか讀めるやうになつて居るのだ、それですら生理學を會得したといふことになつて居ない、それを生れて始めての眼藏といふものを讀んで直ぐわからせやうといふことは、飛んでもない間違ひである。術語が判らないのに字引も引かずに讀まうといふのであるから餘りに蟲が好過ぎるのではないかと云ふやうなことを云つて居ります。實際難かしいものならば解るやうにして讀まうといふのが本當に學問するものゝ氣持であります。難かしいから讀まないと云ふことでは、問題にならないのであります。元來今の教育は蟲の好過ぎるやうに仕込んであるやうにも考へます。貴方がたの方のは學問の遣方が違ふのでありますから、貴方がたの惡口を申上げて居るのではありません。私の近くに居るものゝ中には、解らなければうちやらかすか又は解らないとならば一も二もなく先生に尋ねて見やう、尋ねても先生が知らないからそのまゝにして置かうと云ふやうなのが少くないのであります。それでは學問の進歩のしやうがありません。所が私が佛教のことを少しも知らずに眼藏を讀んだ立場から云ふと、六ヶ敷しくとも讀んで居りさへすれば解るやうに考へられます。昔から讀書百遍其意自ら通ずといひますがそれは偽ではありません。解らないから讀む、解

らないながら讀んで居る、さうして居る中に一語でも二語でも解つてくれば有難い氣持が出る。その氣持を失はないやうにして讀んで行けばだん／＼有難いことになつて來るのであります。貴方がたは佛教の言葉は解るやうになつてお出の方でありますから讀めば解るに決まつて居る、それを解らないと云ふのは讀まないからだと思へます。眼藏のあるものには振假名がつけてあるから、其の通り讀めば間違ひなく讀めるのでありませうけれども、併し何の書物でも讀むのには讀方があります。その讀方を本當に心得て居れば眼藏とても讀むのがさう六ヶ敷しい程のものではありません。道元禪師にしても是は誰が讀んでも解らないだらうと思つてお書きになつたのではないので、これ丈け書いたならば解るに相違ないと考へて書いて居らつしやるのであらうと思へますが、それが解らないといふことは、人間として恥しいこととあります。この恥しいといふ氣持が湧いて來ると讀むのに元氣が附いて來ると思ひます。始めから解らないものだとときめ込む氣持で居つては眼藏は迎も讀めないと思ひます。所で眼藏の中の佛教の術語などは私の近くに居る者達には解らないのであります、之と反對に術語が解つても、今度は假名で書いてある所が分らないと云ふものもあります。昔のお坊さんなどは日本語の「なりけん」など云ふ言葉が解らなかつたらしく、眼藏中の和語の註釋をしたものもあります。例へば「かも」と云ふのは力を強めて物を示すものだといふやうな註釋がしてあります。それで例へば御存じでありませうが本光禪師、即ち三光老人と謂はれる方が眼藏を漢譯されたものがあります、參本と云ひます。かく大變な骨を折つて眼藏を漢譯されたのは普通の坊さんが日本文では讀めないから漢語にしたら讀めるだらうと云ふのだそうであります。そいふやうに文字の讀みにくいと云ふことも境遇々々に依つて相違があるだらうと思ひます。であります

文字が一通り讀めても尙ほ根本の問題として知つて置かなければならないことがあります。それは、正法眼藏の如く概念を概念として固定させないやうに骨を拆つてある書物は他には例は尠ないだらうと思ひます。無論禪宗の語録などを拜見すると、其の多くは概念を打破し、之を流動せしめることを目的としたものが大多數のやうに考へますが併し其の多くは一句一句についての問題であつて、六ヶ敷しい論理を辿りながらその論理の停留しないやうに、概念を用ひながら概念を打破しやうくとしてある眼藏の書振りは實に他にはないのであるかと思ひます。でありますから先づ眼藏を讀むときに一應それを概念的に掴むことは宜いが、その概念を取除ける立場に於て讀まないと思ひます。眼藏に書いてあることが分らないことになつて來るかと思ひます。例へば古佛心の卷の中に出て居りますが、古佛心とは何かといふとは「牆壁瓦礫なり」と書いてあるすぐ次に「故に古佛心は牆壁瓦礫にあらず」と書いてある。一寸見ると何が書いてあるか解らない、併しそんなことに引掛つて居つては眼藏は二進も三進も行かないのであります。此様な文句を彼是云ふのは、眼藏の本義ではないかもしれませんが「古佛心は牆壁瓦礫なり」と云ふ文句を讀んで、成程古佛心は道端に落ちて居る瓦や礫だなど概念的に考へたのではないかぬ、それ故古佛心は其様に考へられた概念的な牆壁瓦礫ではないぞと書いてあるのであります。「このゆゑに」と云ふことは、今書いたのは概念的に物を述べたのではない、眞實自己の「行」として牆壁瓦礫を有るがまゝに掴むその働きが古佛心であるから、何を古佛心と云はうと概念的に掴んだ牆壁瓦礫とは違ふのだと云ふ書方であります。それは一つの例に過ぎませんけれども、さういふやうに眼藏の中には、或ることを述べる、述べるが直ぐ様それを引繰返してさうではないと云ふやうに書いてあります。それを讀むことは實に讀みづらいのであります

けれども、是は一度び概念の打破だといふことに氣が附けば一應そのまゝにして先に進んで行かれるのであります。是は私自身が何も知らないで眼藏を読んで氣付いたことでありますから貴方がたの方では充分御承知でありませうけれども、それを能く心得て行くと、眼藏に書いてあることが場合によれば餘計なことが書いてあると思へるやうなことで書いてある理由がはつきりして來ると思ふのであります。無論禪の立場から云ふと、一應は何んで正法眼藏を書いたかと道元禪師に質問しなければならぬかもしれません。書かなくてもよいことであるけれども、書かなければならぬから書いたのであるといふことになりませう。之に對して道元禪師一言なかるべきか或は一言なくてすむかそんなことは貴方がたに御任せして置きますが、眼藏を一寸見ますと言はなくとも宜い理屈をくどく述べてあると云へば云へる理屈が述べてあります。併しこの理屈は述べなければならぬが故に述べてあるのでありますから、吾々はその理屈は何故述べてあるかといふことを考へ出さなければならぬのであります。理屈の奥底にあるものを把まへて來ると、この難かしい理屈つぽいことで實は理屈ではなくして本當のことが述べてあるのだといふことが能く解るやうに考へるのであります。さういふやうな理屈を超越して眼藏を觀ることは容易ではないけれども、併し眼藏は読んで解らぬものではなく、読んで居れば必ず其内に通ずる道があることは、私が眼藏を會得してゐる範圍に於て確かに偽りではありませぬ。それ故眼藏は解らなければ解らない丈けに、解かれれば解かる丈けに読んで頂き度いと思ひます。無論貴方がたは眼藏を讀んで居られませうが、先程も迎ひにいらつしやつた方が解らないといふうちに濟んでしまふやうだと云つてお出でになりました。實際今日も眼藏、明日も眼藏はいゝが今日も解らない、明日も解らないで解らぬことが當然のことに

なつてしまふやうなことは有り勝ちのことでもあります。餘りに馴れ／＼して、本當の六ヶ敷しさも解らないで、六ヶ敷いものにきめ込んでしまふことになります。六ヶ敷しい／＼と云つて居るから六ヶ敷しさが解つて居るか云ふと、それも解つて居らないと云ふのでは甚だ心細いことでもあります。何事によらずそれは境遇々々に依つて、已むを得ない餘弊が現れてくるものであります。貴君方の解らない難しいのには、これが餘程ありはしないかと思ふのであります。併し、そういふ所に餘弊があることを辨へて讀んで下されば、私位のものにも解るものでありますから、貴君方に解らない筈がないと信じて居ります。殊に貴君方は、「行」を行ずるといふ立場に於てのみ學問をしていらつしやるのであるから、さういふ立場に於て眼藏を御覽になれば、眼藏が解らぬといふことは決してないと思ふのであります。自然科学者のするやうな僅かの細かい二三のものを取扱つて、それをいじり廻して居る立場に於てでも「行」を行つて擱まうとすれば擱めるものであります。始めから行を行つとする立場に居ない者でも、行を行つて把まうとすれば把めるのであります。まして毎日貴君方は行を行つてお出になるのでありますから「行」といふことは何かといふことを少し深く考へて下されば、眼藏を讀むといふ場合に非常に明かな道が其處に現はれて來はしないかと思ふのであります。

話が纏まりませんで種々様々のことを申上げるやうでありますが、其他に私が眼藏を讀みまして眞先にひどく感銘したのは「行持」の卷の眞先に書いてある言葉でありました。行持の卷の眞先には、御存じの通り「行持は道環」といふことが書いてあります。「諸佛諸祖の行持によりて、われらが行持現成し、われらが大道通達するなり、われらが行持によりて諸佛諸祖の行持現成し、諸佛諸祖の大道通達するあり」といふ言葉であります。この文句は今でも非常に感激して

讀まれるのであります。丁度私共の立場から云へば私が兎に角生理學者として生理學の研究が出来ることは、抑々何に依るかと云へば、それは先人が生理學の研究に没頭して生理學を吾々に遺して呉れて居る、その先人の體驗があればこそ、始めて吾々の生理學の研究が出来るのである。唯併し先人の體驗が其處にあり、其の残した生理學が其處にあつても、吾々が尙一步進んでこれを完成する働をしなければ、先人の生理學は何でもないものになるのであります。われらが行持によつて先人の大道が通達するのであります。先人の行持によつてわれらが行持見成するのであります。眞實學問をする者に向つて、何の爲に學問するのかと云ふことの根源を示した實に有難い言葉だと思つて感激して居るのであります。それは一面的の狭い生理學といふ研究だけの立場に於て感銘したのでありますけれども、段々幾らか物事が解つて來ると、この行持の道環といふ言葉の如き實は空前絶後といふか、他の書物にもあるかも知れませんが、實に物事の本筋を此位明に示してあるものは他にはないと思ひます。併しながら多くの人は場合によると自己の行持によつて唯自己の行持を完成しやうと間違つて考へて居るやうであります。申すまでもなく自己の行持は先人の行持に依つて完成されるのであります。私の直接關係して居る醫學の方面などにも何か自分で研究して、えらい事を發見した、あれは俺が發見したのだ、早速學會に發表して名譽を得なければならぬと云つて騒いで居る者も尠くありませんが、實際抑々誰のお蔭でさういふことが出来たのかと云ふことは餘り考へないで自分一人で出かしたやうに考へて居るやうであります。けれども、そんなことは世の中に決してあるものではありません。私はよく學生などに向つて、私が何を喋つても私の智慧と云ふやうなものは、何處にもない。イロハのイの字から人から授けられたのである。それは私の身心を通じて動いて

居るが、それは唯々私の身心を通じて動いて居るだけであつて、一から十まで悉く自分のものはないのだといふことを言つて聞かせて居ります。實際學問を研究する人はよく自分の手柄話をするものであります。その際自分に手柄を興へて呉れた人のえらいと云ふことは知つて居る、即ち學者を崇めることは知つて居ります、併し其の學者の偉かつたことには氣が付いて居つても、そのやうな學者によつて、自分が生かされて居る所まで、氣付いて居る人は尠いやうであります。そういうふことは私が貴方がたに申上げるまでもないことでありますけれども、行持道環といふ言葉、その一句に於て我々は何をしなければならぬのか、何の爲に働いて居るかといふことがはつきりするやうに考へられます。併し尙進んで考へれば先人の行持と吾々の行持が道環するのみでなく、我々のお互の行持が道環して我々の行持が現成するので、道環することによつて私の行持は私の行持として、皆さんの行持は皆さんの行持として現成して來るのであります。この行持が道環することを本當に辨へた後、始めて佛道の爲に佛道を行ずると云ふ道元禪師の立場が生きて來るのであります。能く吾々の間には、科學の爲の科學であるといふことを申しますけれども、科學のための科學といふ抽象的のものが世界にあるものではありません。科學が自己の行となつて、科學が自己の全生命であつて、その全生命が全世界と合體する、萬物一體の立場に於て人生、自然、世界といふものが一體となる、寸毫の隙なく一つになるとき初めて科學のための科學といふことが云はれ、或は藝術の爲めの藝術といふことが云はれるのであります。藝術も人生の一部である、科學も人生の一部であると云はれて居る間は科學のための科學、或は藝術の爲めの藝術といふことには意味が徹底しないのであります。眼藏を讀んで居りますと、佛道の爲めに佛道を行ずるといふ意味の言葉によく出逢ひますがこ

れは所謂佛教を學んで居ればそれ丈で宜いと云ふ意味ではありません。佛道が全人生であり、全世界である、全自然であるときに始めて佛道のために佛道を行すると云ふことが云はれ、唯さういふ立場に於て行することに於て始めて道が成るのであります。それは行持道環といふことに於てのみ成るのであります。道環しない行ならば學問といふことは出て來ないのであります。所が學問のための學問とか、藝術のための藝術といふことを云つて居りながら、さういふことを云ひつゝ自己の手柄として學問を取扱ふ、或は唯己の名譽のみの爲に藝術を取扱ふといふことは誠におかしいところがあると思ひます。自己を忘れて自己が全然ないものになつて、眞實に先人の或は佛教で言ふと諸佛諸祖の有難さをしみ／＼感ずる、衆生の恩をしみ／＼感ずるところに道が現はれて來るのであります。このやうなことは、貴方がたに申上げる必要はありませんけれども、吾々が自己の周圍の者共に自己を忘れることの話をしても中々徹底しないのです。自分がやらなければならぬことがあればこそ自己を忘れるのであつて、自己を忘れてしまへばこそ本當に出来るのであります。實際ものをやつて居るとき自己を考へて居る人は誰も無い、やつた後始めて己がしたのだといふことを考へるのであります。やる時には自己がないのだけれども、後から考へてそれは自分だとか貴様だとか話をして居ります。御存じの通り「佛道をならふといふは自己をならふなり、自己をならふといふは自己を忘るゝなり」といふことが現成公案の眞先に書いてあります。それを唯言葉の上からみますと、如何にも簡單明瞭であります。「佛道をならふといふは自己をわするゝなり」といふ成程その通りだと云つて置けば濟むやうでありますが、所が吾々のやうな凡夫が自己の忘れられることは實際ない、どうしても自己を忘れることは出來ないのであります。尤も是は一方から云ふと人間の本性



である。人間の本性であればこそ現成公案の中にも「華は愛惜にちり、草は棄嫌におふるものなり」と書いてある。人間の働きそのものとして愛惜のあるものが人間である。棄嫌のあるものが人間である、人間の働きとして物を現實有るが儘に把むところに現成公案として物を把かんで居るのであると云ふが現成公案を披くと眞先に書いてあります。そういふ所を少し氣をつけて讀んで行つて自分のすることに引當て、考へて見れば、現成公案のみならず他のものを讀んだところで、さう難かしいものではないやうに考へられるのであります。

さて眞先に申上げた通り私が正法眼藏などを拜讀するやうな機縁は何であるかといふ問題であつたのであります。は何も正法眼藏にのみ示してあることではありませんけれども、生は全機の現なりといふその言葉以外に生といふことを本常に言ひ表はしたものはないと思ひます。此頃漸く西洋でも生命を全體といふ立場から觀やうと言ふ考へが出て來まして、所謂全體説といふものが唱へられて居りますけれども、その考へ方では、本常に生といふことは解らないと思ひます。先づ「全としての働き」として有るがまゝに現はれて居る以外に生といふものはないと云ふことを會得して來なければ、生といふことを本常に把握することは出來ないのであります。それを右の全體説などは全體として觀るのでといふ話は間違つて居ないのであります。その全體が動かない、固定されたものとして取扱はれて居るのであります。働きそのものを見るのではなく、働いたものを觀るのであつて、結局働いて居たものを働いて居ないものとして論じやうとして居るのであります。それでは生命といふものは論ずるときは最早や本當の生命ではないものになつてしまふのは申すまでもないことであります。併しこの眼藏などにあります「全機」といふ言葉によつて表はされて居るものを

把握すれば立所に生命といふ事ははつきり解るやうに思ひます。「生也全機現、死也全機現」と云ふ言葉は御承知の通り本來圓悟禪師の言葉でありますが、それを道元禪師が老婆親切に粘弄して示して居られるのは誠に故ある哉と思つて熟々有難さを感じて居る次第なのであります。それ故生命は何かときかれた場合には、全機の現なりと云ふ以外に何事も云ふ言葉を知らないのであります。この生也全機の現なりと云ふことは禪の文句だ、お前は生理學をやつて居るときにどう考へてやつて居るのかといふ問題が起つて來るかもしれませんが、この「全機の現なり」といふ立場に於て生命現象を觀て居ればこそ、眞實生命現象を生命現象として觀て行くことが出来るのであつて、全機の現といふ立場でみて居らないと、生きたものを取扱つて居りながら實は殺して觀て居るのであります。この立場は現代の生命に關係ある科學、ことに科學的醫學を進歩せしめた所であると同時に大なる餘弊の伴つて居る所であります。生きて居るものをつかまへて居りながら、勿論それを殺して居るのではないが、生きて居ないものとして觀やうくとして居、る例へば私は蛙や慕などを殺して其の神経や筋を取出していちつて居ります、又生きて居るものをそのまま使つて居ることもありますが、生きて居るものを材料とした所で、又其の神経とか筋とか皮膚とかから電氣が発生するとかしないとか云ふことを云つて見た所で、それを全機の現として把むといふ立場に居らなければ、それはそれ丈けの話に止まつて、眞實生きて居ること其れ自身に何等の關係の無い唯生きて居るものに關する個々の事實を示して居るに過ぎないのであります。醫學の方面などで非常に知識が豊富になつて居るに拘らず何處かに行きづまりが感ぜられて居るのは生を全機の現として把握しないからであると考へます。一度生を全機の現なりとして把握すれば、知識が豊富になればなるほど役に立ち

残す所なく使へるが、そうでないと、知識が溜まれば溜る程邪魔になるものであります。科學者が月に日に否時々刻々に進歩する科學を自己の生命に織り込むとき、それは所謂自己を脱落して、生命の眞實の動きを把んだ擧句のことです。りますが、其時始めて人はその生を眞實識得することが出来るのであると考へます。それを生を生として把握しないで、唯科學的成果のみを問題としていぢり廻して居るところに、自然科學の弊害が溜り溜つて今日になつて居るのであると考へます。それは自然科學そのもの、弊害ではなく、自然科學を取扱ふもの、反省の不足でありまして、本當に自己を忘れて居る立場になつて居らないから科學の餘弊が醸されて來るのであると考へます。

さて尙一言申上げて置き度いのは、宗教といふことであります。宗教と名前の付いて居るものには、色々なものがあります。色々なものが宗教といふ名目の中に含まれて居りませうけれども、私が宗教と考へ居るものは何かと云ふと、藪地に自己の生命を把握することであると考へて居るのであります。その自己の生命を把握することに於て始めて學が學として生きて來るのであります。併し學を生かすことを目的として把むのではなく、學を生かす生かさぬは別として、自己の生命を把むところに眞實自己の生命があり、その把んだ擧句には、學は自から生きて來るのであると考へて居ります。この働きの宗教であると考へて居るのであります。無論その生命を把むに付いてどういふ方法によつてやつたら宜いかといふ問題になつて來ると色々な事がありませう、例へば種々の傳統や形式が其の方法に附隨して來て、場合に依つては其の傳統、形式の中に没入すれば自ら生が把まへられると云ふことは、當然起ることでありませう。けれども其の傳統だとか形式だとかは、どう考へても末の問題であつて、自己の生或は其の生の動きが本當に把握されたならば始

めて眞の信仰が生じて來るのでありませう。佛教にたよるにした所で生命を把まへないものが唯抹香を薫いても何にもならないと考へます。勿論先程も申しました通り或る者は或る形式の中へ入つて居れば自から形式に動かされて、識らず知らずに把むことがありませう。それは實に有難い尊い事柄であります。一文不知の人間もそれに依つて救はれるのでありまして、是非必要であり、缺く可からざるものであると考へます。併し現代の教育は先づ理智といふことから人間を育て上げやうとして居るのでありますから、その教育を受けた人間を捉へて、唯形式或は傳統に依つて動かさうとしても決して動いて來ないと思ひます。寧ろ人としてしなければならぬ根本の問題は何處にあるかと云ふ事を一應理智によつて示してやらなければならぬと考へるのでありますが、それをやるのには眼藏の如きはこの上もないものであり、恐らくこれ以外には何もないのであらうとすら考へられます。眼藏に依らないで、理智に依つて理智の巢窟を離脱せしめることは實に六ヶ敷しいことであると思つて居るのであります。さういふ意味に於ても、この眼藏は現代の科學的の社會に生かさなければならぬものであります。この科學的の世界を眞の世界として生かさせて行こうと云ふのに眼藏といふものが、我邦にあるといふことは實に吾々の幸福であると感ぜざるを得ないのであります。でありますから、先づ一應は眼藏を先達、秋山範二といふ方が「道元の研究」として著はされたやうに哲學的な立場から批判し或は解釋して見ることは決して悪いことではないのみならず、眼藏を世間の人に紹介する意味に於て必要なことで、何故今迄「道元の研究」のような著述が出なかつたかと考へる程に、この著書の出たことは眼藏を或る觀方から見、それに依つて眼藏に親しむといふ機縁を與へるであらうと云ふ點に於ては非常に有難い著述であると考へます。唯あの様な書物では行といふ立場

と所謂哲學的の論理といふものが一見して斷絶されて居ります。行と論理とが斷絶して居ないことは道元禪師が述べられた本旨は何であるかといふことを知つて居る者が讀むと、充分に能く書いてあるのであります。けれども、道元禪師の根本の立場を知らないものは考へ誤りを來たしはしないかと思ひます。道元禪師の根本の立場が「行」にあつて、眼藏に現はれて居る論理的の思想は、行を通じて自ら湧いて來るものが述べてあるのであります。論理的思索の結果として「行」といふことが考へられるのが道元禪師の立場ではなく、行を行として行じて居れば、この正法眼藏の思想は自ら出て來るのであります。此の行を基調としての論理といふことを本當に力説しないと、道元禪師を本當に紹介したことにはならぬといと私は考へて居るのであります。此の點は「道元の研究」に充分力説されてないやうに思ひます。從來道元禪師を世間に紹介されて居るのは宗門の高祖として、あつて、其の徳が稱へられて居るものは澤山ありますけれども、實際道元禪師が如何なる立場に居られたか、それが現代に於て如何なる意味があるかと云ふやうな紹介は、目下此の「道元の研究」より外には殆んどありません。そのやうなものに對して彼是批難を云ふことは申譯がありません。それが悪ければお前やつたら宜いではないかと云はれては甚だ恥入る丈けで、自分には出來ないで居りながら人のことを彼之云ふことは申譯がありませんけれども、今申しました通り尙一步進んで行を背景とする論理といふことが力説されることになつたならば、道元禪師の立場が一屬生きて來るのではないかと云ふやうな氣分がするのであります。「道元の研究」には道元禪師の立場といふことが真先に書いてありまして、儒教に對する立場或は老莊に對する立場とかが書いてありますけれども、あれは唯儒教或は老莊などを如何なる觀方に於て批判したかと云ふ態度であります。道元禪師の立場は寧ろ實踐論として述べて

ある所に本當の立場があるのであります。元來道元禪師は論をしてはいけないといふのが立場のやうに考へます。道元禪師のものを見るときに存在論とか實踐論と云つて列べて行くことは、丁度道元禪師がしてはいかぬと云つて居られることをすることになるとも云へます。現代の哲學の立場から云ふと存在論とか實踐論とか云はなければいけないのでありませうけれども、論といふ體系に織込むことは、如何にも眼藏を打壞はすと云へば打壞しになると考へます、が併し打壞はすことすらしない人がある、(笑)打壞す話をして笑つてはいけません。打壞はす力が出て來ればまだしもでありますけれども、齒も立たない人が打壞してはいかぬなど云つたつて無意味なことでありませう。私は實は批難しやうとして「道元の研究」に就いて彼是云つて居るのではありません。彼の書物を見る時、その中の表現の仕方に囚はれて道元禪師を見誤つてはいけないことを御注意申すのであります。

さういふことゝ聯關して眼藏のことを申しますと、眼藏の中には道元禪師が昔の高僧の惡口を云つて居られるところがあります。臨濟も駄目だ、徳山も駄目、大慧もだめだといふやうな事が書いてありますが、之を見て臨濟の小指の先にも及ばぬ人共が、ア、そうか臨濟は駄目なのかと云つたのではそれこそ駄目であります。道元禪師はアレは駄目だと云はれても、それは實は吾々よりも遙かにく偉い人のことであるから、道元禪師の言葉に引懸つて如何にもそうだななどと云つてはならないのであります。所が斯様なことは能くあることであります。私の教室の人々に能く話すのですが學會で色々な話があつた時などに、誰があゝ云ふことをやつたのはいけない、誰があゝ云ふことを云つたのはいけないなど云ひます、と「ではあの先生は駄目ですか」とよく云ふから、そうではない、先生があゝいふことを云ふと、他に偉いこと

をしても疵になるからあゝいふことを云つてはいけないと云ふので、それだから諸君があゝの先生より偉いのではない、自ら反省せんが爲めに批判するのだと云ふ話をします。元來、人の悪口を言ふことは一寸愉快なもので、殊に自分が及びもつかない人の悪口を聞くと、自分のまづいことは棚に上げて好い氣持になり勝なものであります。眼藏の中の批難もそんな風に讀誤つてはならないのであります。眼藏の中に高僧と傳へられて居る人の悪口の書いてあるのはその人の言つた言葉につかまつて、その言葉を概念的に捉へて彼之云つては駄目だぞと云ふことが書いてあるので、例へば臨濟が駄目と云つても臨濟その人が駄目と云ふのではありません。その言葉には足りないやうに見えるところがあつて、其の言葉を讀んだ丈けでは解らないだらう實は其言葉丈で充分足りるのであるけれども、その足りないと見える所を補つてやると云ふのが道元禪師の主旨であると考へるのであります。立派な言葉だがたゞそれを讀んだ丈けでは言葉に引懸つてしまふから、一應これを批難しないと、その人を本當に生かして行くことにならないことはよくあるかと思ひます。王陽明先生の物を讀んで居ると、陽明學は朱子學と對立して居るのであります。何時でも朱子の説が批難してあります。朱子の説ではいかぬ〜と云つてあるのを讀みわけて行くと、その言葉をただその言葉通りに弄んで居るとかういふ弊害が起るからいかぬと述べてあるのであります。王陽明先生自身は一方に於ては朱子の如き偉大な人は澤山はあるものではないと述べて居られるのであります。所が陽明學者の多くは朱子學は駄目だと云ふ、自分が今云つた如く偉くもない、朱子迄にも達しない者が朱子學はいかぬ〜と云ひますが、これは起りやすい人間の通弊であります。昔の人も臨濟や徳山を悪く言つてあることなどに對して神經を悩ましたものと見えて、その辯解を書いたものもありますが今言つ

たやうに實は臨濟や徳山の惡口ではない、讀む吾々に對しての惡口なのでありますから、それをよく考へて居なければ折角道元禪師が老婆親切に吾々の爲めに述べて居られることが却つて爲にならないことになるか知れぬと思ひます。

長々とつまらない事を申し上げましたが兎に角、私が全體今どんな氣持で眼藏を拜見して居るかといふことを、充分申上げたと云ふ譯には参りませんが、まあざつと申上げた積りなのであります。私は門外漢として眼藏が曹洞宗宗門の第一の書であるとか、曹洞宗に於てどれ丈けの意味があるといふことを申上げるではありません。私が自然科学者として生きて居る力を與へられて居るものは正法眼藏であります。それから考へて見ると、現代の科學の世界を眞實の科學の世界として生かして行くには正法眼藏は此上もない大切なものであるといふことを申上げたいのであります。これを以て今日の此處に來ました責を免がれさせて戴き度いと思ひます。(昭和十年十一月二十九日佛教學會講演速記)